



日本福祉大学

国際福祉開発学部だより

News Letter of Faculty of International Welfare Development

May. 2013 vol.

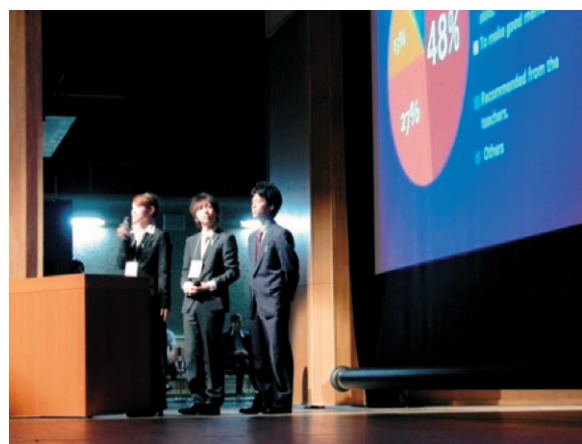
01

〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田 日本福祉大学 国際福祉開発学部 <http://facebook.com/nfuiwd/>

日本福祉大学国際福祉開発学部では、学生の学びをお伝えする「学部だより」を発行することといたしました。この学部では年間3つの領域で学習を展開しています。

①教室②学内で世界連携③世界に出て学ぶ。その後、課題を発見し、次年度のサイクルへとつなげていきます。

教室の学びのあと、ワールドユースミーティングという国際協働体験学習を経て、海外提携校を訪れつつ、国際フィールドワークに取り組みます。国際的なチーム力をテーマに「ICT活用、英語プレゼンテーション、文化比較、コンフリクト・リゾリューション」の課題に挑戦します。



目次

2 学部の学び アクティブラーニング
3～7 海外研修を終えて【国際フィールドワークⅠ】
提携校と連携し、現地で学ぶ

フィリピン 1年 笠井 実香／額根 美穂／橋本 育実
カンボジア 1年 宇野 稀恵
オーストラリア 1年 石川 和哉
マレーシア 1年 倉知 まど香

8～10 海外研修を終えて
イギリス 4年 鈴木 有華
フィリピン 2年 久野 潤平
11～12 海外から寄せられた
ワールドユースミーティングの感想

学部の学び アクティブラーニング

アクティブラーニングとは、理論を学び、それを交流の中で検証したり、調査発表により深く学ぶ等、実感とともに将来につながる知識として定着させる学習方法です。

学部ではこの手法を取り入れた「国際交流ファシリテーション演習」という科目が週1回持たれています。1年生、2年生は全員選択、3年生の参加もあります。

フィリピンからの参加

4月18日さっそくこの授業の特徴である交流を取り入れたフィリピンとの協働授業がありました。フィリピンダバオ市にあるミンダナオ国際大学との連携授業です。

google hangout（テレビ会議システム）に参加してくれたのは3年生のレイアさんです。2013年度、本学で行われる国際交流事業「ワールドユースミーティング」に同大学の代表として参加します。

今年のテーマは「Breaking through Stereotypes」（ステレオタイプを打ち破ろう）です。よりよい関係を国際社会で築くためにどのようなことが必要なのかを話しあい、日本側とチームを組みプレゼンテーションを行う予定です。

事前の交流としてフィリピン人の日本人に対するステレオタイプについて英語で発表してもらいました。自己紹介のあと、オンラインで15分程度のプレゼンテーションをお願いしました。

とりわけ、1年生にとっては少々長い、わからない単語も出てくるプレゼンテーションでしたが、それでもこれから日本にやって来て、ともに活動する友人となる人との時間です。真剣に取り組んでいました。ちなみに今ある日本に対するステレオタイプは、① hardworking People ② Preserve own culture ③ Kawaii culture でした。

また国の比較を行うため学生たちは各国の大卒初任給の比較を行っているのですが、フィリピンの場合 Php 8,000 - Php 20,000（16,000円から40,000円）程度とのことでした。カンボジアはドル換算で200ドルから500ドルでした。

MONTHLY EXPENSES

○ School Expenses (Tuition, Miscellaneous, Nihongo Books)	Php 5,000
○ Transportation	Php 1,440
○ Food	Php 1,200
○ Allowance	Php 960
○ Other Expenses	Php 1,500



TOTAL

Php 10,100

送られてきた資料 学生生活 月2,000円小遣い



フィリピンからのプレゼンテーション

カンボジアからのプレゼンテーション

5月にはカンボジア王立プノンペン大学の学生がワールドユースミーティングへの期待と、日本に対するステレオタイプについてオンラインでプレゼンテーションをしてくれました。音声もよく届きましたが、日本へのステレオタイプとして、ハイテクの国、文化を大切にしている、経済大国のほかに、① Japanese's students like to commit suicides 若者が自殺に組みしやすい、② Japanese are selfish, look down at developing countries and tend to prefer European people 自分勝手に途上国を見下し、ヨーロッパの人々にあこがれる などのコメントに、反論もあったようです。

KJ法

このクラスでは国際的なファシリテーション力を身に着けることも一つの目的です。自分の中に眠るイメージをどのように共有して仲間と作り上げていくのかの体験を行います。理論や方法は青年海外協力隊の経験のある教員が指導します。KJ法の手法も取り入れています。意見をコンパクトに出し、そして近いものを寄せ、全体像を把握していきます。もちろんマーケティング・商品開発等、現実社会で使われている手法でもあります。この夏に向けてテーマを深めたり、自分の仕事を仲間と進める一手段として身に付けようと、がんばっています。



KJ法で「想いを形に」

海外研修を終えて【国際フィールドワークⅠ】

フィリピン 研修

参加者の声を紹介！(学生が責任を持ってまとめた2013 フィリピン研修実施報告書より抜粋。ご関心をお持ちいただいた方は、ご連絡ください。報告書をお分けいたします。)

「全体の振り返りレポート」より フィリピンでの3週間

国際福祉開発学部 1年 笠井 実香

プログラムの3日目から大学での講義が始まりいろいろな分野の先生の講義、様々な場所へ訪問に行きました。その中で「本当のフィリピン」を知り、考え、悩みました。



誰もが貧しいことは嫌なはずです。私はその「貧しさ」というものを決めつける「基準」をいつの間にか持っていました。今の自分の生活が基準でした。そのためフィリピンは貧しいというイメージを強く持っていたのです。しかし貧しいかそうではないかを決める基準はないのです。そして他国に対して貧しいというイメージを持つことはとても失礼なことだと思いました。私は4日目の講義の時に質問をしました。「貧困についてどう思いますか」と。先生は少し怒って返事をされました。「では日本には貧しい人はいないのですか」と。私は答えることができませんでした。自分の国のことすら何も知らないのに、研修で来た国のことを「貧困の国」と考え、フィリピンは貧困の国ですねと言ってしまったからです。この時、私は講義室から逃げ出したい気持ちでいっぱいになりました。しかしここでこの質問をすることがなかったら私は3週間何も感じ取ることができなかったと思うし、無意識に「貧しい」と決めつけていたことにすら気が付かなかったと思います。この日から私は日本とフィリピンを比べながら見ることをやめました。比べるということは無意識に日本を基準にして考えていると思ったからです。私がこの人の生活は貧しいと思っても、その人にとってはその生活が当たり前で貧しいと感じていないかもしれません。

3週間のフィリピンでの生活を終えた今、行く前よ

りも視野が広がりとくさんの視点から物事を見れるようになったと思います。日本の中でしか生きてこなかった19年間。しかし今回フィリピンに行ったことで日本人の考え方の狭さや視野の狭さを感じました。狭い世界、比べることを当たり前にするのではなく、その場所や人をしっかりと見ながら生きていきたいと思いました。

フィリピン研修から学んだこと

国際福祉開発学部 1年 瀬瀬 美穂

現地に着くと日差しや光景、涼しい風など私にとって何もかもが新鮮に感じ取れました。白十字社やセントフランシススクール、JICA など訪問し、各分野な教授の講義を聴き、貧困についての自分のイメージに疑問を抱くようになりました。研修の半ば前半からマイナスな言葉を一切使わなくなっている自分になっていました。多くの人のとのかかわりがそうさせたように思います。

人生初のホームステイで家族のように温かく迎えてくださったご家族の優しさがうれしく、また、大学、パートナーシップセンター、バンのおじさん、どこへ行っても会う人皆笑顔という印象が今でも残っています。そして、フィリピンにいたときの自分は常に笑っていたように思います。人は周りが笑顔だと自分も自然に笑顔になる、ということを感じました。フィリピンは笑顔を大切にしている国で、笑顔で気持ちを表すという文化があると聞きました。すごくフィリピンという国がうらやましく、素晴らしい文化を持っている国に来られたのだな、と実感しました。

研修中、こちらがフィリピンについて聞くように、現地の方も日本について聞いてくるものが何回かありました。例えば、宗教、雇用問題、介護など。私は何一つ自信を持って答えることができませんでした。その時、自分の国をどんなに知っていなかったか実感したし、質問や会話を



るときに英語力が足りないことも本当に困りました。自分の課題として日本を知ること、英語をもっと勉強することが明確になりました。開発についても考えました。バカル村へ訪問したときのことです。その村には橋がなく、街と繋がっていませんでした。橋があると便利だと考えましたが、小國先生と話したとき橋があると必ずしも良いことだらけではないと知りました。橋を作ることのメリット、デメリット両方あるのです。橋を挟んだ村と村との関係性も変わってくる。もし作るとしても、長い川のどこに作るかなど。少しの時間話ただけでたくさん問題が出てきました。開発とは何か全く分からないけれど開発の難しさを初めて目の前のことから考える機会となりすごく心に残りました。

まだ何も見えていないけれどこの経験をこれから何かの形や行動に生かしていきたいと思います。また今回初めて自分で一生懸命英語を使ったこと、大切な友達もできたことなど、本当に素晴らしい研修になりました。

障害者から見る教育

国際福祉開発学部 1 年 橋本 育実

フィリピンで感じたこと

私がフィリピンで最初に身を持って感じたことは日本とフィリピン両国間の障害者にたいする接し方の違いだ。日本では障害者は将来的に自立すべきという考えから、こちらから動かない限り必要以上のサポートはしない傾向にある。対してフィリピンには、ハンディキャップを持っている人に対してカバーできる人がサポートをすればよいという考えがあるらしく、こちらが何もお願いしなくても率先して手助けをしてくれた。どちらの考え方も理解でき、どちらが良いとかいえないが、障害者にたいする新しい考えを知ることができ、自立することがあたりまえだと思っていた私にとってはフィリピンの考え方はとても新鮮だった。

印象に残ったことは Saint Francis School への訪問だった。Saint Francis School にはさまざまな障害を持った子がいたが、主に耳の不自由な子が人口内耳を付けて教育を受けている現場を見学した。全ての教室の床下にコードが通っていて、人口内耳を付けた子供たちがどの教室に行っても音の情報を耳から察知できるようなシステムが成り立っていた。

私は、フィリピンでは健常者に対する教育も完全ではないので、障害者への教育には手が回っていないだろうと予想していたが、自分と同じように障害を持った子たちが教育を受けられている現状に嬉しさを感じた。しかし、この学校に通える子はフィリピン全体のほんの僅かということや、通いでは教育を受けること

ができないため親と離れて暮らしている子もいるというようなお話を聞いた。訪問し終えた後のミーティングの中で、

- この学校に通いたくても通えていない他の子はどうしているのだろうか？
- 小さいうちから親と離れ、人口内耳を付けてまで教育を受けさせる意味は何なのだろうか？はたして子どもたちはそれで本当に幸せなのだろうか？

といったような疑問がでてきた。

そこで私は自分のこれまでの体験と重ねあわせてみた。私は生まれつきの全盲だが、小学校から今まで盲学校には行かずずっと地域の学校に通ってきた。一般の学校に通う中で大変な面もあったが、私の周りにはいつも賑やかな声が飛び交っており、皆と一緒に授業を受けたり話したり学校祭などの行事があれば可能な形で一緒に参加したりする毎日がとても楽しかった。私は多くの人と係りあいながら過ごす一般の学校での日常生活に幸せを感じ、自分の歩んできた道に後悔はしていないとはっきりと言える。

Saint Francis School で、嬉しそうに言葉を発音していた聴覚障害の子供たちの様子や、私たちへの歓迎を込めて踊ってくれたダンスの様子からも私のように自分たちなりの幸せを感じながら今を生きているのではないかと思う。

まとめ

この研修の中で障害を持つものの立場から見て「教育とは何か」ということについて深く考えさせられた。研修前の私は教育＝知識を教えることだと考えていたふしがあったが、研修を通して考えが変わった。「教育とは何か」、障害者にとっても健常者にとっても、どのような教育が皆の「幸せ」につながるのか。この問いに対する自分なりの答えを今後見つけていきたい。



引率教員よりひと言

高校を卒業して間もない1年目で、初めての海外体験としていわゆる「発展途上地域」国を訪問するのは、大きなチャレンジです。でもだからこそ、若く柔軟な感性で、固定観念に惑わされない目を養い、一生つきあえる友人と出会えるのかもしれない。

初年次の国際フィールドワークは、残り3年間に有意義に過ごすための大きなステップです。小國 和子 准教授

カンボジア
研修英語、国際協力、国際福祉をキーワードに
カンボジア研修で見た貧困と教育のつながり

国際福祉開発学部 1 年 宇野 稀恵

1. カンボジア研修を選んだ動機

国が貧困から抜け出すためには教育が重要な役割を果たしているのではないかと考えていました。この研修では、多くの学校や孤児院といった教育現場や農村部を訪問できると聞き、「教育と貧困」というテーマで、もっと詳しく学びたいと思いました。

2. 貧困の悪循環を断ち切る

カンボジアで気づいたことに、都市部と農村部において教育内容に差があるということがあります。都市部ではほとんどの人々には英語が通じました。農村部の人々には現地のことば、クメール語しかわからない人が多く、英語で話しかけてもうまく伝わらないことがよくありました。都市部ではビジネス、商売のため外国語教育が重要視されている一方で、農村部では外国語教育はあまり重要視されていないのではないかと感じました。都市部には仕事もあり、海外からの観光客やビジネスマンといった人も多いため英語を使う機会も多くなりますが、農村部では外国人との交流の機会も少なく、仕事もコミュニティーの中だけに限られる場合が多いようです。教育をしっかり受けることができれば仕事の選択肢も増えます。しかし、家庭の経済環境が厳しく、自分たちも仕事を手伝わなければその日暮らしていくことも大変な家庭に住んでいる子どもたちが多いようです。そのため学校で勉強できる時間は限られ、裕福な子たちと比べて教育のレベルは低くなると思います。このような環境はカンボジア国内で教育のレベルの差につながっていきます。さらにそれによって貧富の差が広がり続けることでしょう。学校へ行けない子どもたちと貧困の連鎖は否めません。

3. 現実に見た貧困の連鎖とは

貧困から抜け出そうと仕事に専念する→教育を受ける余裕がない→きちんとした教育を受けていないため高収入の仕事に就けない→十分なお金にならない→貧困から抜け出せない、といったサイクルです。このサイクルは一度陥ってしまうとなかなか抜け出すことが

できません。

今、カンボジアでは貧困といわれるのは農村地帯に限らず、都市部でもこの悪循環のせいで教育を十分に受けることができない子どもたちが何人もいますからです。きちんとした教育を受けさせてあげるには、まずこの貧困の悪循環を断ち切る必要があります。CIFTO や Make the Heaven、KAFS といった海外からの支援を受けることで、村のインフラを整備し、子どもたちに時間のゆとりを与えられることによって、子どもたちが学校へ行ける可能性は大きくなります。そのことによって、少しずつではありますが、貧困の悪循環から抜け出せるのではないのでしょうか。

4. これから

今回のカンボジア研修で、海外からの支援がどれだけの大きな力になるかを実感しました。恩恵を受けている子どもたちはみんな生き生きとしていて、パワーが満ち溢れていました。私も将来、子どもたちが笑顔になってくれるような活動ができたらいいなと強く思いました。まだ学生の私にはできることが限られてくると思います。しかし、ほんの些細なこと、例えば募金やスタディーツアーに参加するといったことでも、今の私にできることを精いっぱいやっていこうと思いました。



2013.2.25 CIFTO



2013.2.26 CCMHA 孤児院

オーストラリア
研修Meaning of My Stay
in a Foreign Country

国際福祉開発学部 1 年 石川 和哉

日本からオーストラリアまで約 14 時間、やっとオーストラリアに到着しました。飛行機の中で、二週間のホームステイ生活に期待と不安を感じていました。英



大学のカフェ

語のスキルアップが今回の目標だったので、積極的にホストファミリーとの会話に参加し、大学でたくさんの人と会話してこうと心にきめ、タスマニア大学に入っていました。最初の学習はタスマニア大学の留学生用のスクールで、そこは海外学生が大学に進学するための EFL 学習システムがありました。様々な国からの留学生が来ており、写真は、大学内にあるカフェの様子です。当たり前ですが、何かを買うのも英語だし、聞こえてくるのは英語ディベートだったり、この環境が自分を伸ばすのだと考えれば、楽しくもありました。

ホストファミリーとの生活は、一日目の午後からでした。最初に会ったのは、ホストファーザーの John でした。70 代の男性だったのですが、車の運転は軽快で、昔、学校の教師をしていたそうです。奥さんの Jonna は、ほんとによくしゃべる人で、僕らに日本語で会話する暇すら与えてくれませんでした。でもそのほうが結果としてよかったかもしれません。お互いに料理が大好きで、滞在中には、様々な料理を作ってくださいました。期間中には三男のマーカスさんと、娘さん夫婦が訪ねてきました。その夫婦には、お子さんが三人いて、しゃべるスピードが結構速くて英語を聞き取るのがちょっと難しかったです。

今回の研修で、一番興味深かったのは地元の高校 Rosny college への訪問でした。みんな一生懸命準備したプレゼンテーションをするということで、気合が入っていました。僕たちが訪問したのは、日本語クラスでした。まずは、ペアを作ってお互いに自己紹介を

し、その後はカタカナの練習を一緒にしました。自分の国の言葉を勉強してくれていると思うと少しうれしかったです。日本語クラスの生徒は、勉強熱心で、僕らの英語に比べ、彼らは、どんなに間違っても最後まで諦めず話していました。ここが日本人と外国人の大きな違いだと思いました。お昼も一緒に食べ、つたない彼らの日本語と英語でのコミュニケーションは思い出深いものでした。僕らの英語をじっくり聞いてくれたし、色々言い回しなどを教えてくれました。

午後には僕らのプレゼンが始まりました。みんな結構緊張していましたが、事前の国内研修でがんばって準備したかいがあったと思います。

二週間の間に、いろんな所に行って、英語で見て、聞き、会話する機会をえました。ツアー時などには、普通のスピードに



ちょっと戸惑いましたが、少し日本語を喋れるひとがいろいろ気を使ってくれて、それなりに楽しめました。

タスマニアの人々は、他人とのコミュニケーションをととても大事にしていたように思います。ショップの店員さんにさえ、「やあ、元気？」と普通に話しかけていました。日本人も周りの人とのコミュニケーションに配慮すれば、もっと穏やかに日々を暮せるのではと思いました。人が毎日生活することの中に定着しているコミュニケーションのありようには多くを学べました。



ホームステイにて

マレーシア
研修

マレーシアでの英語教育

国際福祉開発学部 1 年 倉知まど香
英語教育について

今回の研修で英語教育を1つのテーマに取り上げたのは、マレーシアの英語教育に興味があったからです。私は海外でもすぐに人に頼ってしまい、英語を間違え



ることがとても気になります。英語を学ぶ姿勢がこれではいけないと感じていました。

マレーシアでは自分から英語を使う機会を増やし、挑戦しようと思いました。私たちの研修と一緒に行動してくれた USM【マレーシア科学大学】の学生と約2週間で共にして多くの良い刺激を受けました。かれらは英語とマレー語の両方を話すことができ、USM 学生同士での会話はほとんどマレー語で、私たちと会話をするときは英語を使っていました。その多才な言語活用に最初驚きました。こんなにも器用なことをマレーシアの学生は坦々と行っていました。

英語の学習にも特色がありました。英語の講義では教科書の内容を家で予習し、授業では教科書に沿った講義はなく、話し合いが中心でした。英語ができて当たり前という講義はとても魅力的に感じました。私が普段大学で受けている英語の授業とは全く異なった方法でした。なによりも、USM の学生は英語にたいしての向上心がとても高いように思いました。すでに流暢な英語を話していましたが、その力をさらに高めようとしていました。常に上へという向上心を持っているように思えました。

言語学習も独特でした。かれらは日本語についてもとても勉強熱心で、疑問に思ったことをすぐに私たち

に聞いて、メモを取ったり、覚えた日本語を実際に何度も使い、使いながら習得する態度を持ち続けていました。

言語習得の方法が生活に根付いているように感じました。マレーシアの人は幼い頃からマレー語と英語の両方を使って生活をしており、それが私たちの年齢で活用まで高められていると感じました。

ホームステイ

ホームステイ体験は今回の研修が初めてで、期待と不安でとても緊張していた。英語の通じない家庭でしたが、みんなとても親切な方ばかり



で、すぐに溶け込むことができました。USM の学生バディにマレー語を英語に通訳してもらいながらホストマザーと会話をしました。その英語理解に必死で対応しました。

私のホームステイ先の家庭にはホストマザーと4人の子どもがおり、ホストファザーは普段離れた場所で仕事をしているため一緒ではありませんでした。6歳と9歳の女の子はいつもわたしと一緒にいてくれて、折り紙を渡すと折り紙の本を持っており、本の中の指さしたものを折ってあげるととても喜んでくれました。

ホストマザーが作ってくれた料理をわたしがとてもおいしいと言うと、ホストマザーは毎晩その魚料理をだしてくれました。

近所の子どもたちも何の抵抗もなく私に接してきてくれてすぐに仲良くなれ子どもの活発さは日本と同じでした。思い出深かったのは、マレーシアの結婚式ではヘナンという花婿が手に模様を描く儀式があり、近所の家でそのヘナンを体験しました。下書きに沿って特殊な絵の具でなぞっていき、とてもきれいな模様を描いてもらいました。ホームステイは2泊3日間という短い期間でしたが、多くのマレーシアの方の優しさや、とても貴重な文化にも触れることができました。これはマレーシアでしか体験できないホームステイだと思いました。

海外研修を終えて

イギリス
研修人のそばで支える体験
一年間のイギリス研修を終えて

国際福祉開発学部 4 年 鈴木 有華

私は昨年度 イギリス、湖水地方の身体障害者施設で語学、福祉ボランティアを体験しました。1 年間という長い間でしたがおわってみると、利用者さんたちとやっと自然に会話ができるようになったころ帰国となり、ちょっと残念な気がしました。しかし、その経験は一生私の生き方を支えてくれる貴重な体験となるように思えます。

施設

HOLEHIRD（ホールハード）で利用者約 30 名で、障害の重度などは様々でしたが皆車いすでの生活でした。毎日の仕事は Early と Late というシフトに分かれていて、朝 8 時から入り朝ごはんを出し、10 時半からはお茶の用意、お昼までみんなとクロスワードをしたり、ゲームをしたりしました。コミュニケーションをとりつつそばにいてあげることが私の仕事でした。お昼にはちょっとした食事介護をし、午後はほとんどの利用者さんが自分の部屋にいきお休みするので、少人数で映画鑑賞などをして、ゆったりとした時間を過ごしました。

3 時に Early は終わり、11 時半から入る late シフトの人は 3 時にお茶の用意をし、夕ご飯まで一緒にお話をしたりしながら過ごします。私はよくピアノを弾いて、利用者さんたちがテレビだけにならないよう工夫したりしていました。人がそばにいる それだけでも重要な役割と自覚できました。当たり前ですか、英語でのやり取りです。表現を直してもらったり、貴重な時間となりました。5 時半くらいに夕ご飯をお手伝いし、6 時半には終わるというものでした。

英語は

基本的な会話にはこまりませんでしたが、しかしイギリス、最初は、under（アンダー）→ ウンダー、I can（キャン）→ アイ カン など、イギリス風のアクセントに戸惑いながらも楽しんでいました。朝

ごはんのとき、利用者さんがヨーグルトに蜂蜜 honey をかけて欲しいとお願いしたのに、honey の発音がホニーと独特で、理解するのに時間がかかることがありました。そういったことから利用者さんに少しストレスを与えてしまったこともあったのかもしれませんが、しかし、利用者さんとのコミュニケーションなどで日々慣れていくことで自分の英語力の上達を実感することができました。



施設（ホールハード）にて

帰国後の就職活動

いま就職活動を行っています。思ったよりスムーズです。台湾での国際交流大会、大学での国際協働企画 World Youth Meeting での英語プレゼンテーションの経験などを評価していただき英語関連企業に五月には内定をいただくことができました。もちろん海外にまた行きたいと思っていますが、考え方の基盤にもなる日本での社会経験が必要という考えに落ち着きました。教育という子どもの「幸福を願う福祉」という立場で英語も活用しながら働き、人が生きる意味、ともに生活する意味を考えながら成長していきたいと思っています。

学んだこと

英語は学問対象ではなく、コミュニケーションのツールであると確信しました。心を通わせ見つめあい、時には手をつなぐことも大切です。そのためには基本となる英語の学習も必要です。大学生のうちに 4 年で

一年間海外に出ることは、やや冒険に思いましたが、日本という孤立した島国の良さを改めて分かりつつも、海外で出逢った人々や文化に影響され自分にとってプラスになることがとても多かったです。また、在英中にイギリス内はほとんど旅行し、他にもフランス、トルコ、ロシア、ドイツに旅行してきました。どこも新鮮で様々な文化があり、新たな出会いもありとても良い経験となりました。トルコでは、商売として必要となる語学力の高さにとても驚かされ、生きるために必要な言語として理解することができ、また日本人の英語力の低さを実感しました。（今は小学校英語導入など、取り組みがされていますが）

大学在学中に研修を設定した理由

大学での学びが実際に活用でき、それが生きたと感じたことは、イギリスでの福祉の現場での対応でした。これまでカンボジアなど訪問し途上国で生きる子どもたちにふれて、生きること、生活することなど考えてきましたが、その時の時間が、生活に障害のある人と接する際に活かすようにおもいました。これまでの学びが知らずと身につけていることが多かったのです。

ICTの力も必要

一年というスパンで異国、イギリスで生活できたのも、ICT（情報通信技術）の発展のおかげといっても過言ではありません。必ずや抱える問題、ストレスに悩まされた時も、Skypeを通してゼミの先生や友達、家族と話したこと、Facebookを使って海外や日本の友達と会話をしたことは、とても大きな支えとなりました。また、大学生として海外に行くことで、一人で参加するとはいえ先生方からの温かいサポートがあり

とても心強かったことを覚えています。異国でゼミや大学とつながりながら学ぶ体験ができたと思います。

いまは四年ということで卒業もすぐですが、イギリスで出会った人々、貴重な経験、またカンボジア研修やアメリカなどすべての経験を忘れずに、これからも自分の成長の糧にしていきたいと考えています。



静かな環にあるホールハード



昨年4月に行われたゼミでのスカイプ、お互いのがんばりが励ましとなる。

フィリピン
研修

どうやったらこんなに素晴らしい施設を？ （国際フィールドワークⅡ）

国際福祉開発学部2年 久野 潤平

1. なぜこのフィリピン研修を選んだのか？

僕は、将来現地でNGO団体を作りたいと思っています。今回、現地にある擁護施設 House of Joy (HOJ) など訪問し、スタッフがどのように動いているのか、そして、ランニングコストや現地の人の給料はどれく

らいかなども詳しく知りたいと思いました。理念も重要です。働く人たちの生の声、働くことと生活することなどをぜひ聞いてみたいと思いました。哲学、マネジメント、マンパワーの活用の視点です。

2. HOJ との出会い

僕達が滞在した、この施設での暮らしはとても豊かとは言えませんが、貧しさの中に確かな「幸せ」があったように思います。HOJに着くと、早速子ども達が出迎えてくれました。「Let's play 鬼ごっこ」とさそい、ともに動き、すぐみんなうちとけることが出来ました。子どもは体を動かすことが大好きです。それから4日間、フリーな時間は子どもたちと「鬼ごっこ」を心がけ、さりげない会話を楽しみました。

1日目の夜に、Welcome Party をしてくれました。そこでのアクティビティで歌を一緒に歌いました。ともにいる時間で心を通わせたいという思いが伝わったのでしょうか、ステージから見たみんなの顔と笑い声は今も心に残っています。歌声に響き、ステージ上で笑顔で歌っている姿を見ていたら、なぜか泣けてきました。この子どもたちに今の僕の力で何かをしてあげたい、かかわりたいと強く願いました。

笑顔が常にある HOJ。どうやったらこんなに素晴らしい施設を作れるのだろうと考えてみました。それは、厳しい規律の中での自由もしっかりデザインされているからだと思いました。その規律を守らなかったら楽しみがなくなるというシステムが子どもたちにちゃんと伝わっています。ルールを守り、お互いを大切にする、それを行動でわかるように伝える、それがシステムとして機能していました。教育担当の大人、社会福祉士、マネジメントリーダー、精神的なリーダーすべてが心をつなげて運営されており、同じ方向をむき、ケアすることの大切さを感じました。生きて機能する哲学が隅々に感じられました。3日目は、午前中にノートプロジェクトを実施しました。ノートに僕達の写真と僕達からのメッセージを書きました。たわ



ノートプロジェクト

いのないものでしたが、ノートという一つのツールを使って、子どもたちと会話をし、また、ある子が僕達の似顔絵を書いてくれました。

3. 見えない愛を見える行動で



サッカーは僕の特技であり、僕の人生の中で一番熱くなれるものでもあり、「サッカーで交流」も今回のテーマです。試合は、接戦でとても緊迫感があり、終わった後に言葉を越えるスポーツ、サッカーはやっぱりいいと感じました。また自分が主体的に関われた充実感もありました。この施設の理念は「見えない愛を見える行動で」示すことであり、思いをそれぞれの得意分野で発揮し、願いを基礎としてみんなで動きます。YouTube に動画をアップし世界に伝えることにも心がけています。つながり続けることをアイデアと行動でサポートしてくれます。支えあい、声を掛け合い、大人が「行動を愛で示す」、このように「哲学の活きる」施設が日本にはデザインできているでしょうか？

教育担当のスタッフ、社会福祉士の役割、働くおばさんたちの連携が、「想い」に支えられていることがよくわかりました。マネジメントの面でも確かな運営を行っていることを学ばせてもらいました。僕自身もそのような環境の中で本当に幸せな時を過ごし、またとても勉強になりました。

帰国後、参加した学生たちは、報告集を作り上げ、お世話になった大学、施設に文章を寄せました。現地の支援に感謝し、英語で発信し、関係を作ろうとしています。

海外から寄せられたワールドユースミーティングの感想

ワールドユースミーティングとは、世界の若者が集い、日本側とチームを作り英語プレゼンテーションによって意見を交わす国際協働学習の事業です。本学部が主催し文部科学省はじめ関係機関の後援、支援を得ながら1999年より毎年夏に開催されています。今年度で15回目を迎えます。昨年は「未来につなげる Strengthening Connections into the Future」をテーマに、カンボジア、フィリピン、マレーシア、インドネシア、中国、韓国、台湾から学生・生徒を迎え、開催することができました。また、2月には国際フィールドワークで参加者の大学を訪れ、再び「英語プレゼンテーション」「シンポジウム」などの企画で現地交流の時間を持ちます。カンボジアやマレーシアの学生の感想文をここに掲載します。彼らの体験した交流や、体験の声に耳を寄せ、今年度も準備が進められています。ワールドユースミーティング 参加者報告書 (抜粋)

10-Days Meaningful Journey of World Youth Meeting 2012

Ratanaksamrith You
Royal University of Phnom Penh, Cambodia

World Youth Meeting 2012 - 7th and 8th August 2012

In my group, there are 4 members. Two of them were Nihon Fukushi University students, and the other was a student from Institute of Technology of Cambodia. Actually, our group had already discussed some of the main points in the presentation outline before arriving Japan. We communicated through email, Skype and Facebook. My team members were very active, hard-working and cooperative. However, there was language barrier that each member found it hard to display his or her opinion using the right words to express. Despite the difficulties, the progress was not staggering, and we managed to get over it successfully. Generally, in discussion, there is always conflict of ideas, and so did our group. Nevertheless, we overcame it by learning from the lectures made by professors from famous universities and high schools. We learnt how to collaboratively solve conflicts where everyone is a winner, and my group successfully did it. Moreover, we also learnt how to live in intercultural environment. This was really critically important because participants from different cultures generally cause controversies. The result was incredible. Everyone became intertwined with one another like siblings.

In the early morning of the day, everyone woke up with excitement and nervousness, including me. I finally arrived at the most exciting moment of 10-days Journey of WYM. The hall was incredibly surprising. Big audience made the stage even more exciting. The arrangement was perfect. Many programs followed the opening remark were really interesting. What made the event even greater were presentations made by various groups of different universities and high schools from different countries

across Asia. Their contents and performances were informative and amazingly fascinating. I really learnt a lot from those presentation that I thought I could never have another chance to learn such unique lessons ever again. My group presentation did well to what we expected and we got Platinum Award. To my point of view, I would evaluate my group presentation 99 out of 100 because not only that our performance went well, but also tight cooperation and teamwork that my team embraced. Moreover, presentations made by professors were really enlightening. We saw our strengths and weaknesses through their lectures and feedbacks. Furthermore, we were really inspired by them to commit ourselves for improvement in the future, and hopefully, for World Youth Meeting 2013.



Group photo after the presentations

World Youth Meeting 2012 theme was “Strengthening Connections to the Future”, and we really did it. During the event, I made a lot of friends from Japanese high schools and universities. We left our memories by exchanging written messages. Each participant tightened their connections and these connections would last not only today but forever. I am still contacting them everyday now. Not only that, sincere thanks to Professor Kageto, I was introduced to many remarkable leaders and professors from big companies and famous universities. I knew a lot of new people in just 2 days. It was extraordinary. World Youth Meeting 2012 ended with joy and memory.



Group photo after the presentations

Conclusion

World Youth Meeting taught me a lot. First, in private sphere, I was improved by inspiring lectures and I learnt many new things from the WYM presentations. Second, not only me, but also everyone were able to have a chance to experience intercultural environment. We shared experiences in our cultures, and we learnt so much from one another. Thirdly, everyone learnt how to collaboratively solve any conflicts despite their differences in nature. Fourth is public speaking. This was my first time on stage to do a presentation to a very big audience. I became more confident when speaking on stage. Moreover, I learnt a lot from professor how to make a good presentation and to be a great presenter. Fifth is my understanding about Japanese culture. Participants had chance to explore the beauty of Japanese culture through homestay, seminar house, Japanese inn, and sightseeing that displayed vivid living environment in Japan. They were able to see things that were totally different from their countries. After experiencing them, I felt in love with Japan and Japanese people. Last but not least, the most important one is connection and friendship. Tightening international cooperation between educational systems of different nations was one of a remarkable achievement. I was really glad that I met new people at WYM2012, and especially, my new friends at Nihon Fukushi University. They made me felt like home and gave me so much to remember. I wished our time together were longer. I love them!

I left Japan with many unforgettable memories. I was so sad that it ended so quickly, but I hope I will have another chance to join World Youth Meeting, hopefully I have more time, and meet my lovely friends and professors at Nihon Fukushi University again. After arriving in Phnom Penh, Cambodia, I shared my exciting experience to my friends and other people, telling them how wonderful World Youth Meeting was. The meaningful memory of World Youth Meeting 2012 had big impact on my life and it lives in me forever. Joining it was a milestone in my history. Next year is going to be more awesome!

THE LAND OF THE RISING SUN.

Report on World Youth Meeting 2012

University Sains Malaysia

Noor Afiah Md Noor

The theme of this year's World Youth Meeting was "Strengthening Connections Into The Future." We started discussion about the theme with our counterparts in Japan from Penang, Malaysia through the internet. Communication was made through the use of emails and that was how we decided to come up with a topic. Both sides discussed and agreed on having "Communication Towards World Peace" as a topic. From there we started with the research and also distributed questionnaire to students from Nihon Fukushi University and University Sains Malaysia to get data's and a student's point of view on the topic. It was difficult at first to get questionnaire to the students form University Sains Malaysia as at the time of the preparation the university was already on their semester break. But at the last minute it all worked out well .

It then came to the day of the World Youth Meeting; our group will be the last presenter of the last day. It was really nerve racking being the last presenters. All the participating university and schools gave such a great presentation. The topics of their presentation were all relevant to the theme and it was really interesting to listen to all of their presentation. Our presentation went well and got good comments from the judges, we were all very happy after the presentation as we had given our best. We received the Platinum Award for our presentation.

I think our collaboration of the groups went really well. I really appreciated all the hard work and effort that my team members and also the steering committee of the world youth meeting have done. I left Japan with a heavy heart saying farewell to new acquaintance, new friends and a new family. But I leave with amazing memories that I will forever keep inside my heart. Thank you Japan for your warm and beautiful people, amazing views and breathtaking scenery. You are indeed an amazing painting in the beautiful art gallery that I call world.

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田
TEL. 0569-87-2211 FAX. 0569-87-1690
<http://facebook.com/nfiwd/>
編集人：国際福祉開発学部 学部長 影戸 誠
准教授 佐藤 慎一